



大倉孫兵衛壽梓

梅堂國政画
武田交來録

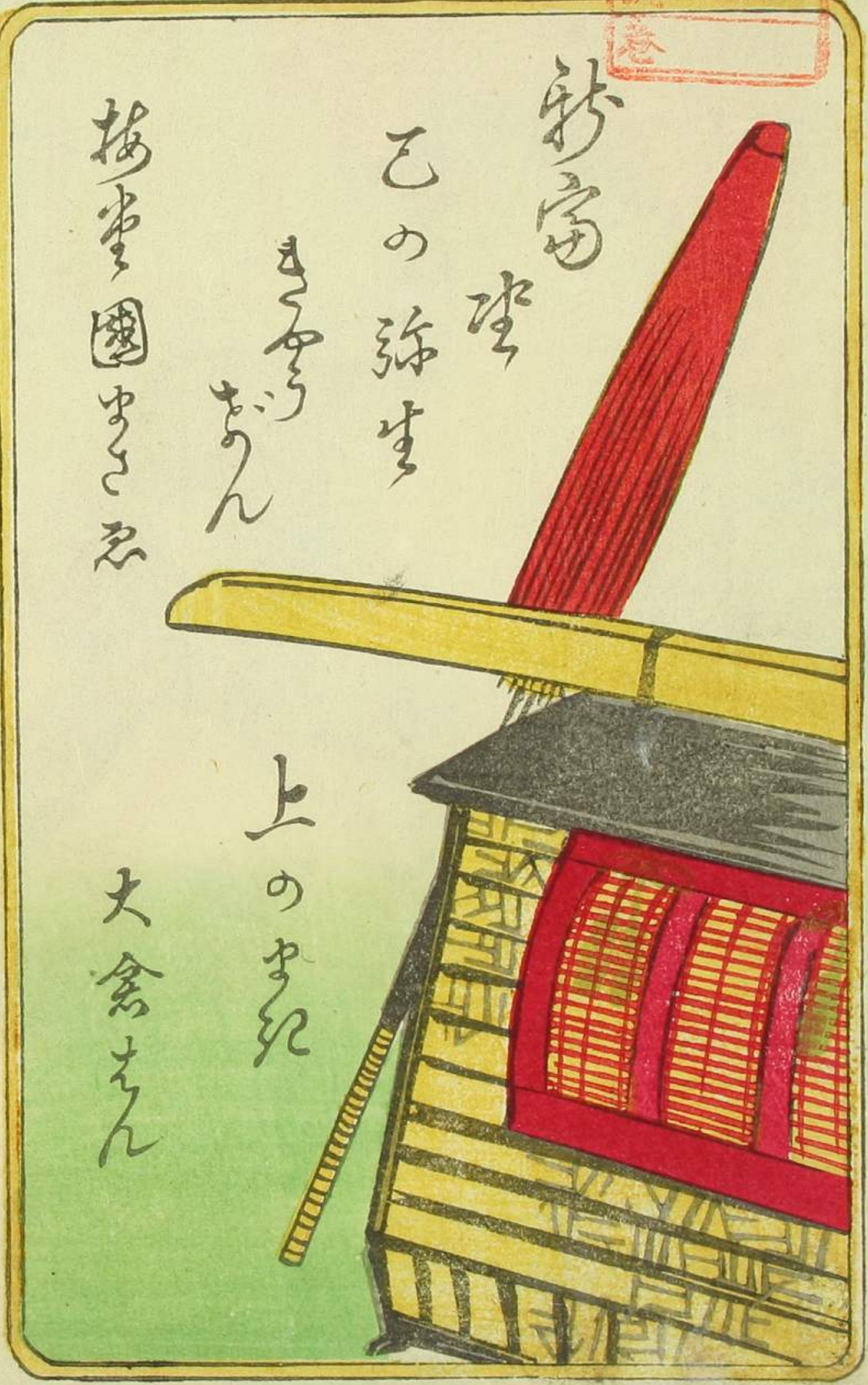
尾田彫長

上

手 13
4420



門 千13
4420
巻



新富

堂

己の弥生

まきやう
まらん

梅雪園中さる

上のまね

大倉まらん

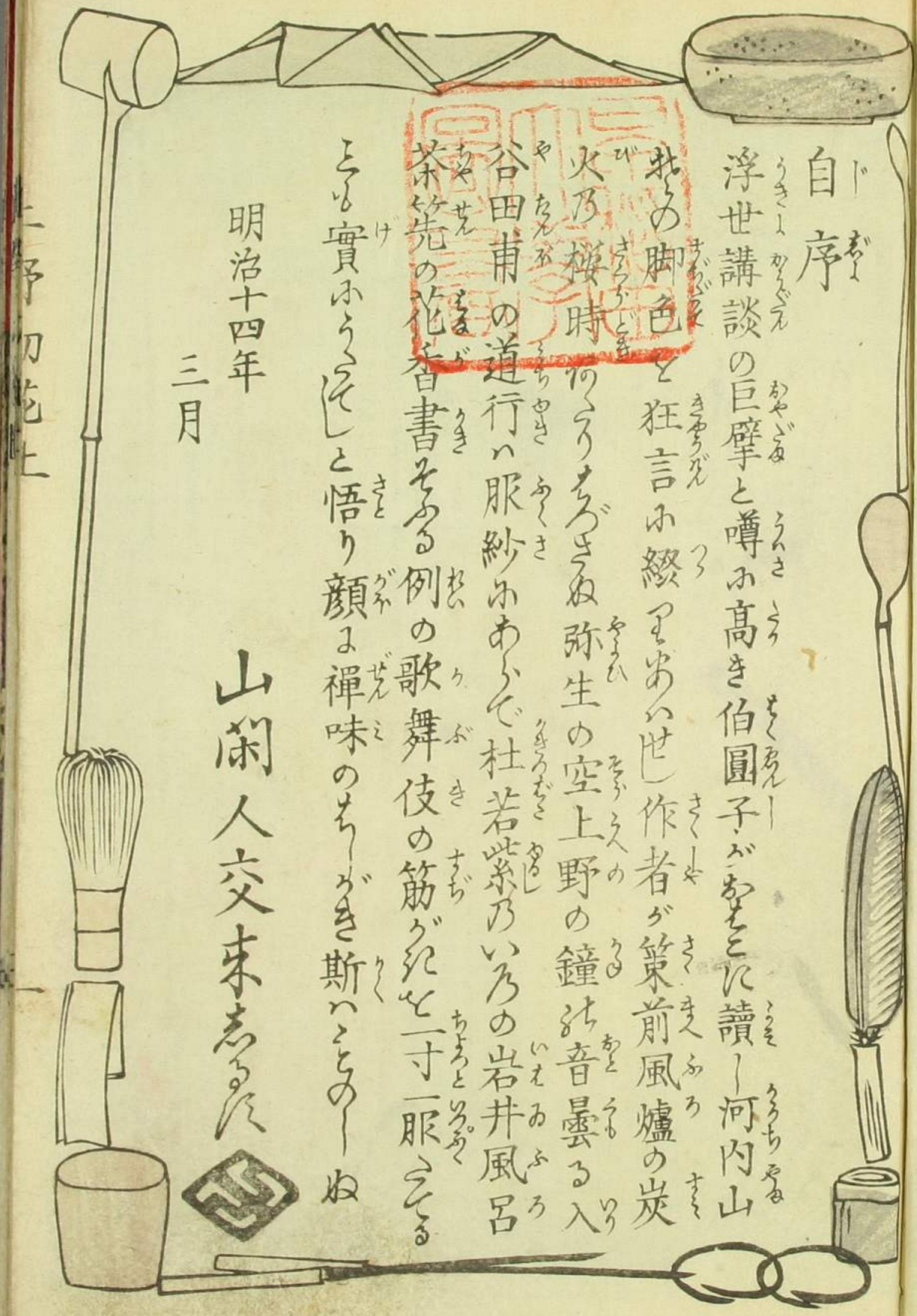
自序

浮世講談の巨擘と噂の高き伯圓子(うきよのこうだんのかいびやくのたかねのたかき)がわをこに讀(よ)み河内山(こうちやま)の脚色(きゃくしやく)と狂言(きやうげん)小綴(せうてい)の世(よ)作者(さくしや)が策前(さくぜん)風爐(ふうろ)の炭(すす)火乃(ひの)機時(きとき)の空(そら)上野(じやうの)の鐘(かね)音曇(ねぐら)る入(い)り谷田甫(やたふ)の道行(みちゆき)の服紗(ふくさ)のあはれ杜若(つばき)の岩井(いわい)風呂(ふろ)茶(ちや)笠(かさ)の花(はな)香書(かうしよ)の例(れい)の歌舞伎(かぶき)の筋(すぢ)が尺(しゃく)を一寸(いちゆん)一服(いつぷく)を二(に)とる
 とも實(まこと)ふらふらと悟(さと)り顔(かほ)は禪(ぜん)味(あじ)のちがき斯(ごと)くものぬ

明治十四年

三月

山閑人交末あるは



上野切花上

淨瑠璃
忍逢春
雪解
清元連中

あか
大
口
樓
三
千
歳

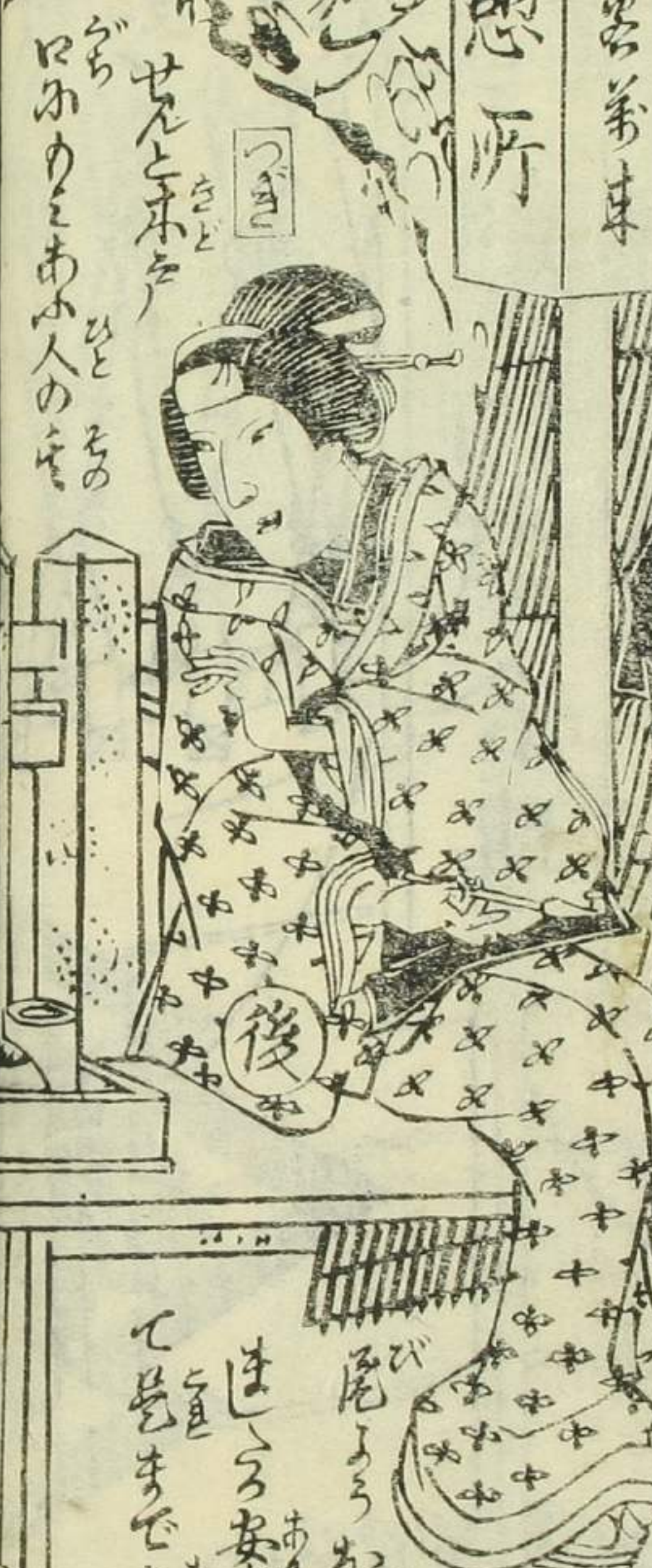
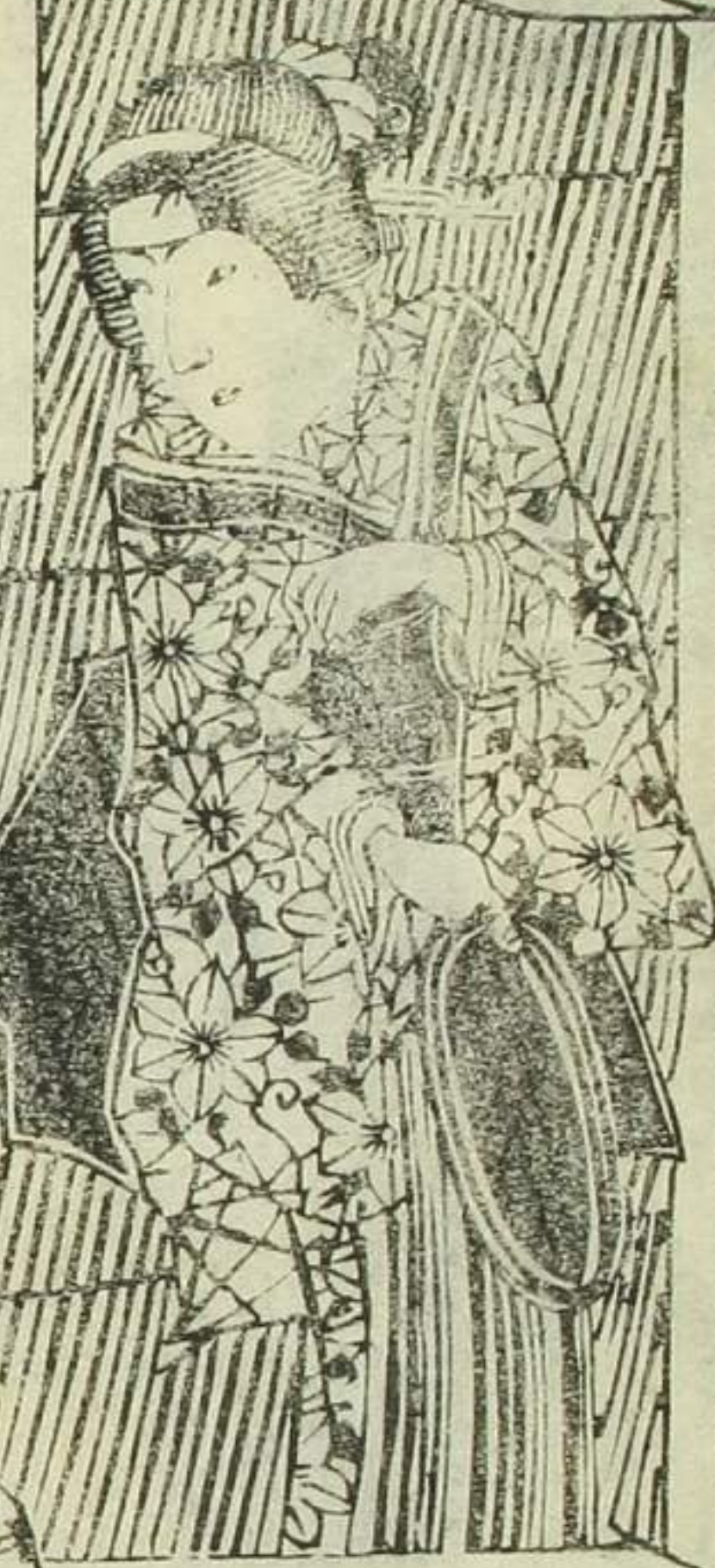


片岡直次郎



千客兼来

由 惣所



④ 王しく
 おふら
 さあはとあ
 られおきだ
 え送り
 おのと何し
 ハイ私
 お嬢様
 お暇
 尾よう
 はら安
 て是ま
 月

中
 上州
 後家



ん切
 一粒
 おま

② 中
 助
 上
 下
 新



③
 新
 元
 後
 と
 取
 取



① 何と云ふ事か
流の何と云ふ事か
お母ねや
お母ねや
お母ねや

お母ねや
お母ねや
お母ねや
お母ねや
お母ねや

お母ねや
お母ねや
お母ねや
お母ねや
お母ねや



お母ねや
お母ねや
お母ねや
お母ねや
お母ねや

お母ねや
お母ねや
お母ねや
お母ねや
お母ねや

つぎ 娘の事

いよいよまきぬ

ちの後のうら後

かめあつては清

百あ色もまじ

宗俊さる移

ありよふ七敷

ひ中糸とつろ

けとねきれん

白く洗髪三日

内ふあふまなへ

送す届はると

何と推察の別

色ゆくは小喧

くと大騒動

金ふが小座

ふさんと悪客

の五松ごう村

伸るどうどう

て喧嘩おな

らんとはるを

と山内のおか

迷惑と云に

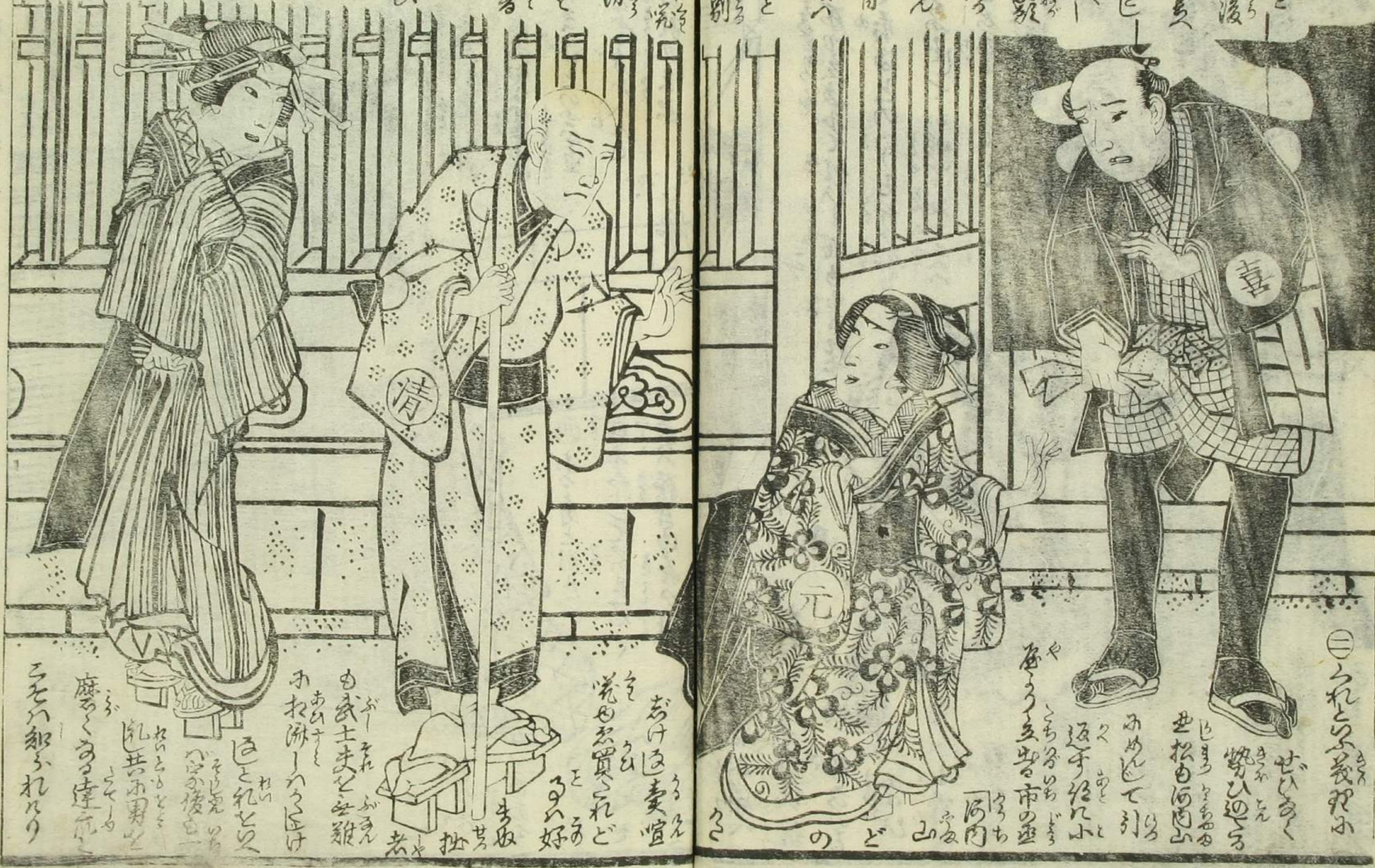
宗俊五松と

後中へ喧嘩

おれまる

己に任せ

上野刃巻上



三つれと云後わ

せいかく

勢ひゆる

世松の河内

みめて引

返すはれ小

やうとち分り

河内

のど

おける妻喧

送もお買これど

と好み

おれまる

おれまる

おれまる

おれまる

おれまる

おれまる

おれまる

おれまる

おれまる

おれまる

おれまる

おれまる

おれまる

おれまる

おれまる

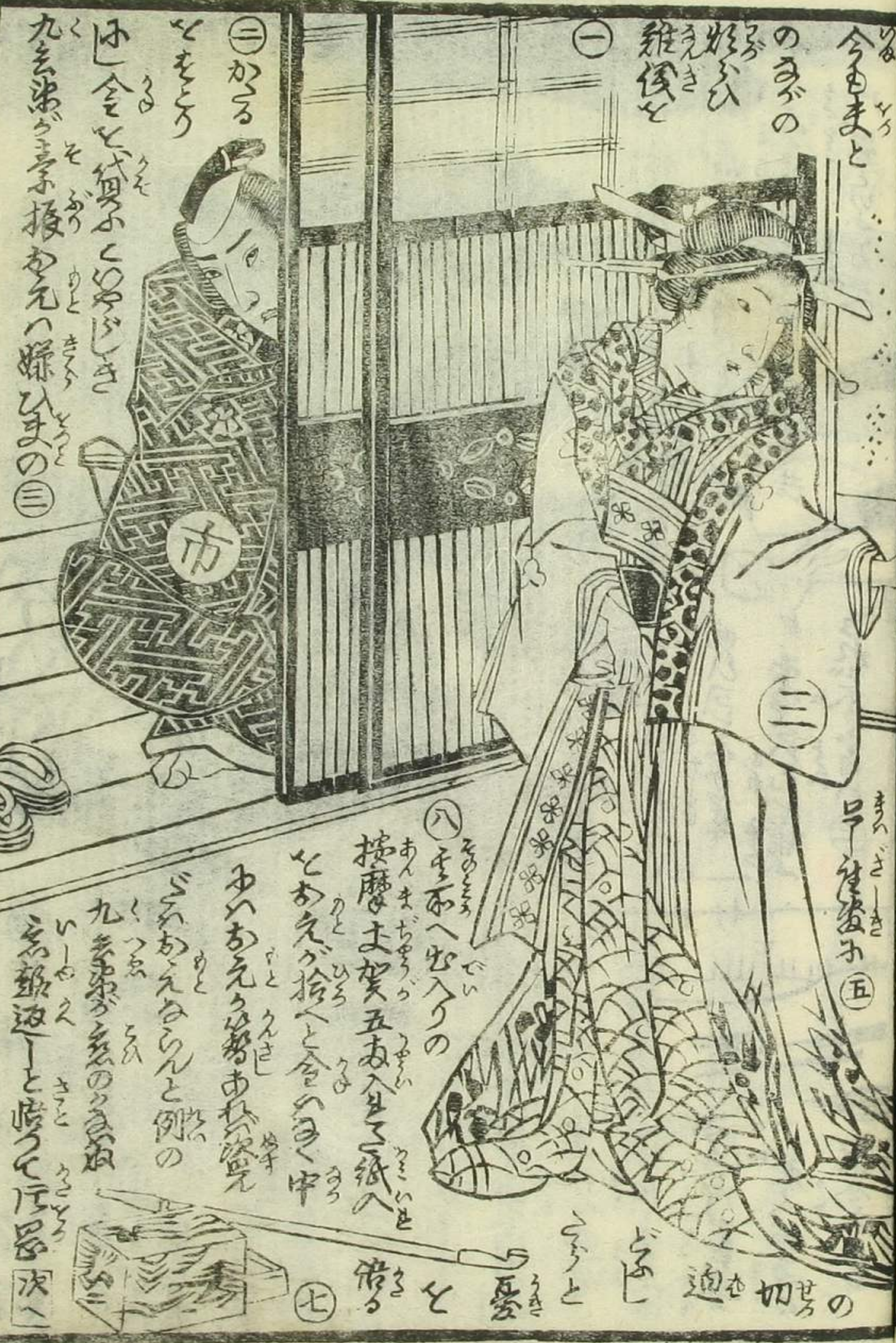
○昔京なる月夜多口
橋の元世のお留守家の抱へ
の二お家お互ひ通下客
とのあけ行思遊遊常と

合子市の遊
張余今宵
も大一往
又次大

只存去来の女房おえいお針
の雁ひ父い八世の家まあて
植木屋の存去来とのい遊
親父おえいどようまお入んと
子てお後書取九去来

今もまと

のみの
娘
雑貨



①
②かろ
③
九去来今宵扱おえいお入んと
九去来今宵扱おえいお入んと

④ある身とめまが
面おらしておめまが
裏ハ發ぎの存去来



⑥
と菓千ち二ひ

⑤
⑧
接摩は架五あ入る紙入
とおえが拾へと合へる中
あおえうおあお入る
九去来今宵扱おえいお入んと
九去来今宵扱おえいお入んと

新富座

當世言

海軍
虫



大倉板

上巻よりつきまきて浪踏いねて教るどのと

念ひしてあやうがと世実の死に教るい
胸り忠義あつきの文情教る何故不義を

彼さうなとのと殿の影ひあひまふ

あまきと重なる信と智とけまむるを儀

高木小太郎の後の世前へ平依は大振

はじめ忠義と虎胆ふけやア大振との

夫人なほ

そのもと

おとろ

情が不義

み世と云

撥ぐー



② ぎうろくと同格ら見て思ふま

出せを富座怒りあひ「三人は振るま

あやせよ平小達ら不浪踏教るを付

いふとのまき死ねる言ふは初せばは

出せと教練めて身運るは下のと

やせともあやのあはるあまの赤

癖あてやとらまると

等々まぐ

つぎ 虎丸
かぶる
はくと
言葉い
そと
いそ

ち田

いそ
樹りとつ
てあはと
突おせ首ふか
と後胸とを
小左衛門の
カレまく大振
は借

人わが
失礼
と花の
家俊
ことお笑
ひ源
の家老
そんなら
いつても
と蛇ま
肝を冷
いそ

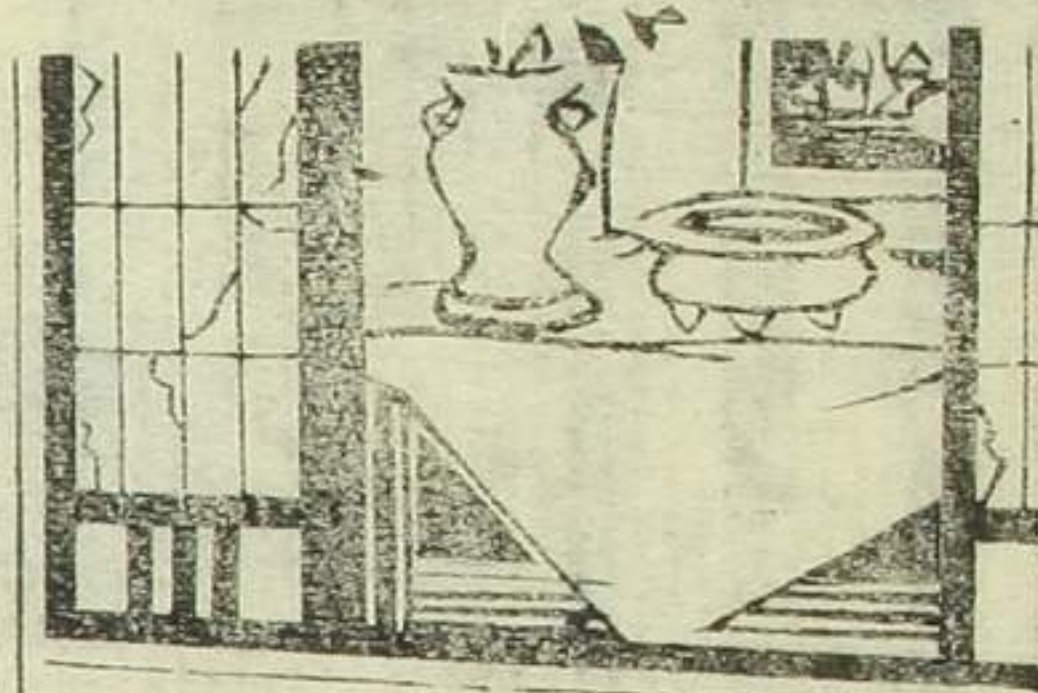


二
と香
うち
みじ
家は
て河内
山所
徳とも
まじり
○

のた
のた
のた
のた
のた
のた
のた
のた
のた
のた

上野初花中

つき 後悔 ぼて ぞお あり けり 多々 尋ねて 末々 大に橋の二十 け小寺 かとつて するまの行



三 尋ね味 ぐま とつる ふうおん いたに 打ひ 可い ぐお店よ ぐあそ 掛先二百 友持遊 ぐあそ

大只出入のお汁 見えが家と書法ゆゑ ありと不乃世活ふる ありらると寺ま 由も引合せゆくと けとぼろまへん ありおえが好ま七い 作田の活登へまの目 肩尾よく勤めあけ たるゆかしのこに ありの活と便らん ありゆくと姉が位と一



らせお相り 四の 雲いそ 三 と 七酒と掛ひお橋 中まの西園 が一吸日色人の 云付ゆて次へ

天衣紛上 あまのひまがふ
 野初花 のゝはつはな
 中幕 なかつまく
 千代譽言松 ちよののちよとまつ
 山美談 やまびだん

下





上平刀下



つぎのまじり
とる者やが事
性ど活ねは
感涙と涙一なり
斤量八分付
あゝの世
河通の寺田氏
半七屋の
難儀二百両の
と御り取ら比企の
是ううけ方
御字の化



八〇 伎中
國松守の
珠を水
やでい
若出相
私人の世
の多き幕府
の法は家
全段取
交はして
田中務副は
とて丸

司の二面
面として
妙通へ
ごうり末と
のそくと
行屋
翁心
寺
新の
は法世
敬い
〇東西
松山
一



六下
七
直
十
代
の
肉
の
次

一葉中の
 老共妻子
 とまて甲冑
 小舟とてあ
 付もどく
 女持て格
 小舟死と
 足踏の
 仲小巻
 田家の
 付も攻
 うら一

けられずむぎ
 く家名断絶
 こまの残巻
 母のとりくよ
 手懸巻と
 家老掃方
 但馬杉山殿
 前せはあじ



④の
 用志志
 きりきり
 大石とあ
 干戈と
 ⑤
 ⑥
 幼うらひ敵の必死
 物ら味方小枝とあじ七
 小残りりり



⑧
 ⑨
 ⑩
 ⑪
 ⑫
 ⑬
 ⑭
 ⑮
 ⑯
 ⑰
 ⑱
 ⑲
 ⑳
 ㉑
 ㉒
 ㉓
 ㉔
 ㉕
 ㉖
 ㉗
 ㉘
 ㉙
 ㉚
 ㉛
 ㉜
 ㉝
 ㉞
 ㉟
 ㊱
 ㊲
 ㊳
 ㊴
 ㊵
 ㊶
 ㊷
 ㊸
 ㊹
 ㊺
 ㊻
 ㊼
 ㊽
 ㊾
 ㊿

①
 ②
 ③
 ④
 ⑤
 ⑥
 ⑦
 ⑧
 ⑨
 ⑩
 ⑪
 ⑫
 ⑬
 ⑭
 ⑮
 ⑯
 ⑰
 ⑱
 ⑲
 ⑳
 ㉑
 ㉒
 ㉓
 ㉔
 ㉕
 ㉖
 ㉗
 ㉘
 ㉙
 ㉚
 ㉛
 ㉜
 ㉝
 ㉞
 ㉟
 ㊱
 ㊲
 ㊳
 ㊴
 ㊵
 ㊶
 ㊷
 ㊸
 ㊹
 ㊺
 ㊻
 ㊼
 ㊽
 ㊾
 ㊿

上予刀色一

三

つぎ 始め とお 勘えり 八七 外お 女結 子の隣 比正の羽 人老丸



二八 とうとん は

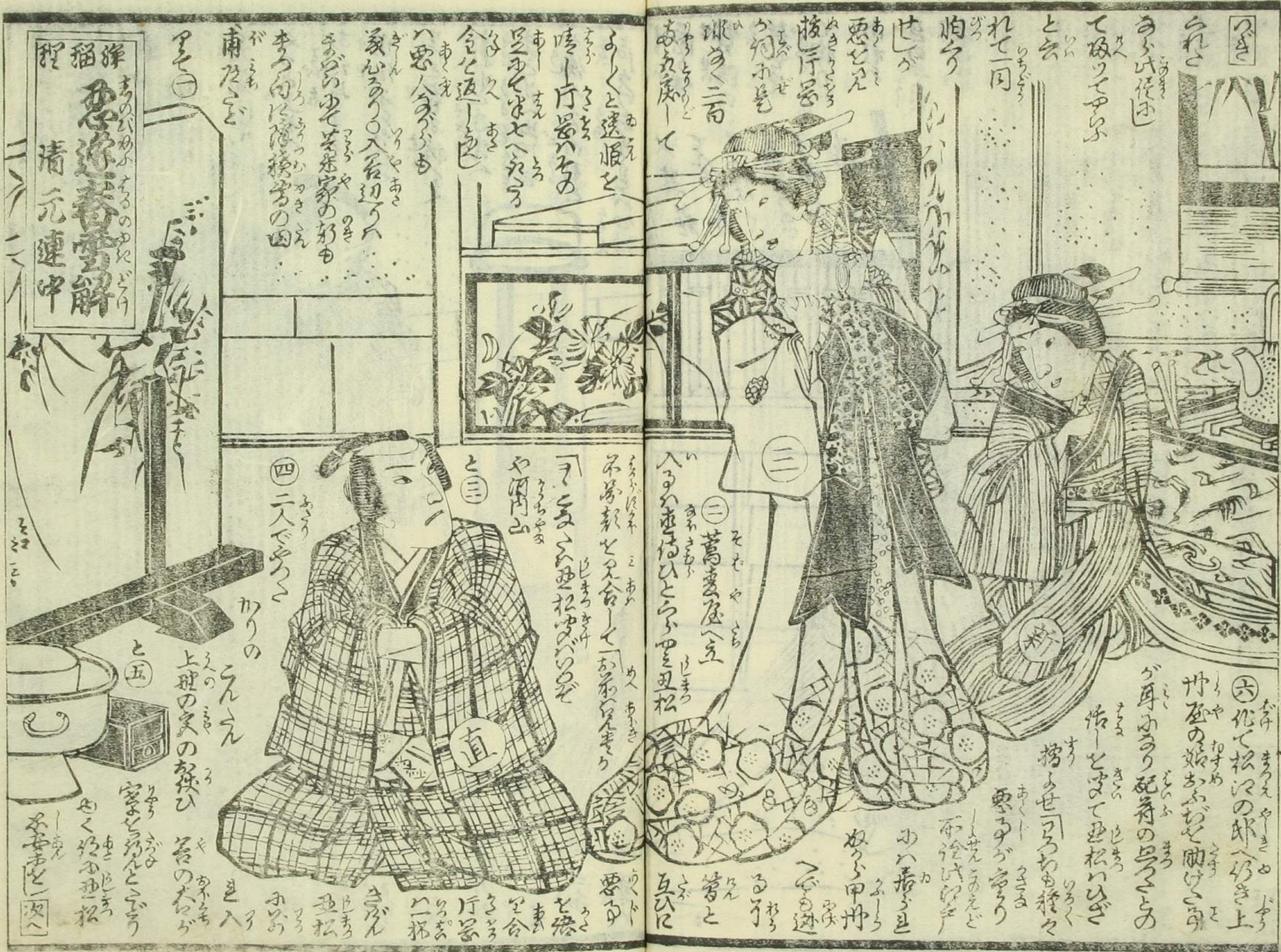
比正種 くの押和め 五十あき程の 久つて異と程とで 由行屋ハ(三)

四 括束りて 二 昨日の夜や 五 夕

まろい 飛か仔 世の 勢清の 親と兄 て相り くれぬ きの小若 赤心兄 子と湯桶 さらでの悪者直結ひ と玄奴をあら化てうせ とうらと一回(若らねばあぞげとあひ 皆作天世とんせとるハ黒雲の巫松あで化 せ殿子車はひしゆも動らぬ須夫徳り(一)



六 べとんあひせ 九二 百あそろ 夕返と(次)



稲 穂
 清元連中

あはれと速服と
 嗚一庁景の
 是も七へたう
 合と返一色
 へ悪人まふも
 羨心ありの入居迎る人
 手前のせそ悪家の好も
 幸う向に隠糖方の因
 甫乃と

世に
 悪せ
 後片
 小舟
 蹴き二百
 める度して

あはれと速服と
 てぬつてやいふ
 と云
 れて同

直
 四 二人であつて
 かりの
 五
 上野の文の教ひ
 答のたむか
 家とつんとて
 ちくちく松
 女とて一渡へ

三
 二 萬葉屋へ
 入るに速はひとらふやと丑松
 名義教と合して一おれはなまきり
 河内
 六 化て松江の郎へはき上
 竹登の娘おちを助けて
 身あつて死符のつとよ
 情とてはて悪松のひ
 揚ふせつらおも種々
 要るが
 不詮は
 小八番
 ぬら甲州
 二の
 管と
 互に



つぎ天の
 網おたる
 あは
 せめて一
 め
 目
 兼小
 せめて
 とのふまを
 のねと面
 ぐ死無の
 あらぬ白
 多換子

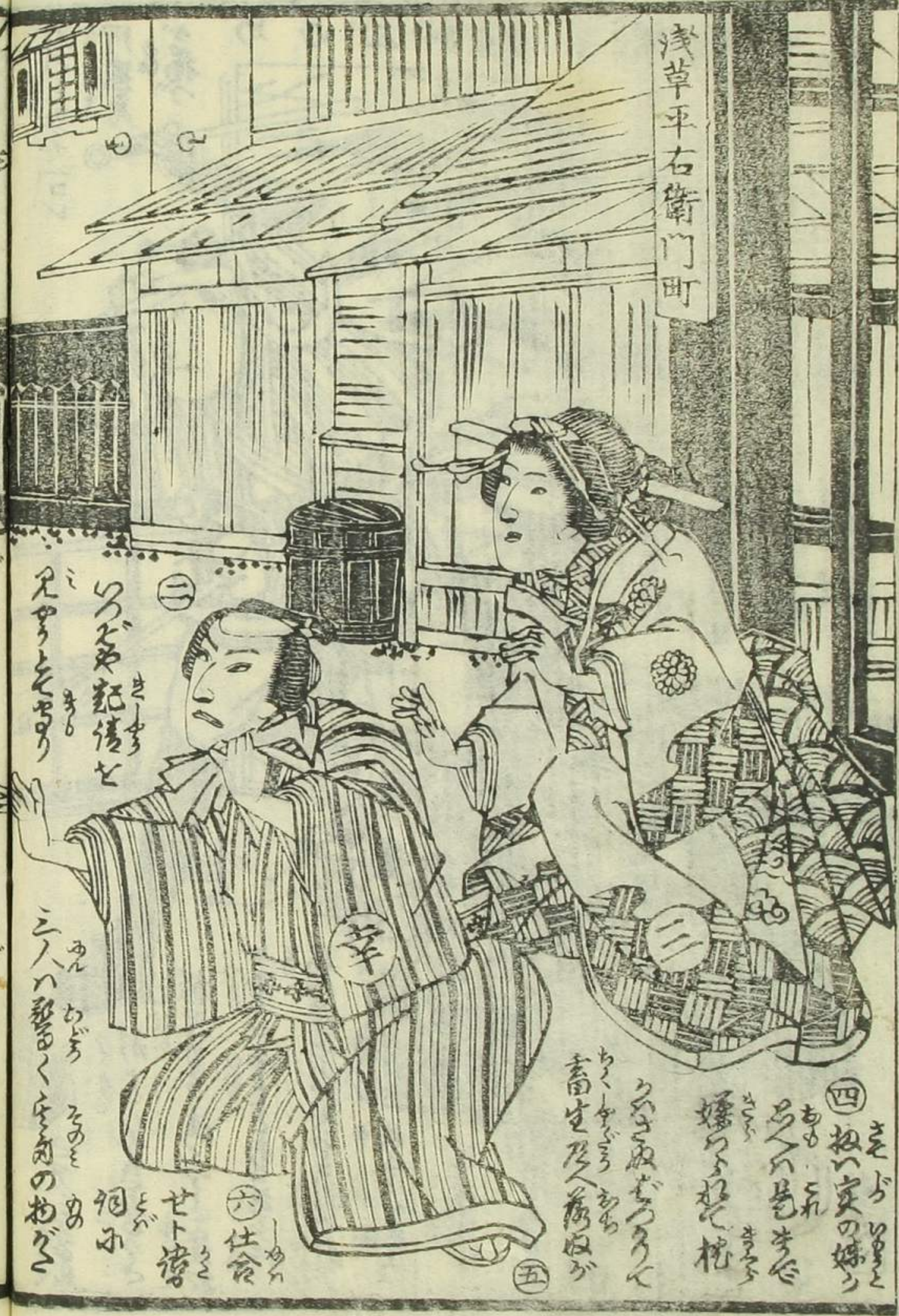
宗
 何あ由兄
 母が武士の
 焼子色
 二
 何あ由兄
 母が武士の
 焼子色



め
 三
 茶
 と
 横
 酒
 合
 の

茶
 何あ由兄
 母が武士の
 焼子色

浅草平右衛門町



二 けいねん記後と
えやうとせきり

三人の聲よくそわの物づく

四 扱ひ家の婦
あつたはきき
嬢のむねは
うさぬむらう
畜生及後ぬが

六 仕合
せと清
相小

連て

うせうとせ

小愛りし合ふか
相小行はる子
茶不実のての今

合ふがうい今こそ
あつたはきき
あつたはきき

あつたはきき
あつたはきき
あつたはきき

あつたはきき
あつたはきき
あつたはきき

あつたはきき
あつたはきき
あつたはきき

あつたはきき
あつたはきき
あつたはきき

二 予 刀七下



依衣と船とこれあひひ
あつたはきき

五 相小のあつたはきき

あつたはきき
あつたはきき
あつたはきき

あつたはきき
あつたはきき
あつたはきき

あつたはきき
あつたはきき
あつたはきき

あつたはきき
あつたはきき
あつたはきき

あつたはきき
あつたはきき
あつたはきき

あつたはきき
あつたはきき
あつたはきき

